岩瀬文庫コレクション

かみ代物語（西―7）1巻

『古事記』『日本書紀』にみられる海幸・山幸の神話を描く絵巻です。主人公の火々出見尊（山幸）は兄（海幸）の釣り針を失くし、叱責されて探すうちに、翁に導かれて海中の竜宮へ向かいました。竜宮城で竜王の歓迎を受け、無事に釣り針を見つけた尊は、美しい竜王の姫と結婚し、大ワニの背に乗って地上へと帰ります。竜王から授かった潮の満ち干を操る玉（干珠・満珠）で兄を懲らしめ、兄から王位を譲られると、姫に子が誕生し、立派な御所を建て、国は末永く繁栄しました。その子の子が後に神武天皇となる、という物語です。同じ物語を描く絵巻は現在6点が知られていますが、本品は中でも最も古い室町時代後期の作と推定されます。

立体感や遠近法にこだわらない素朴な描写や、所々に大胆に金箔を貼った明快な彩色、大振りな衣服の模様など、おおらかな魅力に溢れています。本絵巻には江戸時代後期に茶人や書画骨董収集家として活躍した木村兼葭堂の蔵書印が押されています。「浪速の知の巨人」兼葭堂も、こうした素朴で個性的な味わいを愛したことでしょう。

▲ユニークな姿の「五丈のわに」に乗り、竜宮から地上へ帰る尊。釣り針を持つ竜王が先導し、干珠・満珠を捧げ持つ姫君たちが従う。

シリーズ 69

西尾の古を探る

三河万歳

三河万歳は、長寿を祝い長命を祈り、家が永久に栄えることを初春にことほぐ芸能です。三河万歳の起源について書かれた「万歳由緒書」によると「目出度き言葉によって万歳と名付け、鼓は悪魔などを祓う鳴り物なりと云い、鼓を打って万歳を祝えば災を除き、陽気に万歳楽を祝えば五穀も成就するとあり、幸を招き災いを除く故にこれを災除と名付け、いつの頃か才蔵と呼ぶようになった」と記されています。

吉良太夫が三河守大江貞基へ年始めに万歳楽を祝い申し上げた際、貞基は国中の人々に長く喜んでもらおうと思い、万歳をもって諸国を巡行させました。万歳師は「世の中に安穏太平たいらの京、誠に目出度い」と内裏を始め、御武家や社家寺院、民家に至るまで万歳楽を舞い祝い「万歳とは、君主栄えてましますと誠に目出度く候へけると、古来より是まで上様まで祝い奉り申し上げ来り候也」と書かれています。

西野町小学校御殿万歳クラブの万歳は「楽しいですね。鶴は千年の命ある鳥、亀は万年の齢を重ねる。鶴や亀に勝るほど、千代を経て万歳まで。新しい年の始めの朝には水も若返り、木の芽も咲く。栄えて富が来る、これを祝う者が万歳です。都ができて御祝儀を申し上げ、難波・奈良・京の都も安らかに、政事も穏やかで、四海の波も静かです。お上がよければ下々も、平穏に船も浮かびます。運命長久を祝い、御家繁昌をお祈りします」と始まり「豊かに栄える光を仰ぐ時代こそ楽しいですね、君は千代、千寿万年も末永く栄えます」と謡い舞っています。